

タイムウォッチ——人生は二度ある

数寄屋橋交差点を築地方面に歩いていく。銀座大通りの両サイドには、艶やか^{あで}な樹木が立ち並び、相変わらず通りとしての優雅さを誇っている。その銀座大通りを五分ほど歩いた交差点から信号の二つ目を入った路地の一角に、そのビルはあった。ビル全体は、茶系のレンガ張りを配した外観で少し古めかしさはあるが、とても重厚な感じがする。その築四十年はたつだろうと思われる茶系のビルの一階で、ひっそりと営業している時計店。店主は、白髪の六十代半ばの男性で、気品のあふれる風体は、時計という時を刻む道具を扱うプライドなのか、きつちりとした身だしなみが印象的だ。

店のショーウィンドウには、年代物の時計から最新式の時計まで、整然と置か

れていた。

この辺りは、艶やかな樹木が立ち並ぶ大通りとは対照的に、道幅は三メートル弱で、銀座の面影はだいぶ薄くなる。よって人通りもさほど多くはないし、ましてやショーウィンドウで立ち止まって店の中に入り、時計を買っていく人の数は日に一、二名である。

しかし、人通りの少なさは、私にとって非常に幸運だった。私は、この銀座の路地裏で生まれた。生後まもなく両親に見捨てられたけれど、何とか生きてきた。一人で生きることとは、とても大変だったけれど、幸い路地を走る車の往来が少なかったため轢^ひかれることもなく、また人々にいたずらされることもなく生きのびてこられた。

私が時計店の主人に世話になってから、もう何年がたっただろう。真冬の凍えてしまいそうな寒さのなか、エサもなくなり困り果てている時に、彼に拾われ、今に至るまでここで厄介になっている。主人が元々猫好きだったのが幸いして、私は生きていく場所を見つけることができた。

店主は、一日をのんびりと暮らしている。

先程述べたように、店の中に客はほとんど入ってこない。当然の如く店主は、私を相手に独り言を言ったり、ひざの上に乗せてくれたりと、私も何となく一日をのんびりと暮らす毎日が日課となっている。

しかし、こんなおのんびりとした日常が、これから話す事件をきっかけに一変してしまっただけだ。

その出来事は、ある日深夜に起こった。私自身は早々に眠ってしまうので、自分の判断から深夜と言ってしまったが、時計店の住人（いや世話になっている猫だけ）、時計店の一員としては、時間を正確に伝える必要がある。午後十時三十分であった。店主はすでにシャッターを下ろし、店の奥にある居間でくつろぎ、少し眠りかけていたかも知れない。それは、店主が頭をゆっくりと振子のようにゆらしながらテレビを観ているように見えたからだ。私はといえば、店主のそばで床に伏せて、一人ピンポン玉で遊んでいた。私の右手がピンポン玉を遠くに飛ばしてしまい、取りに行こうと起き上がった時だった。

突然店内に、異様な空気と少しばかりの明るさが現れたことを背中に感じた。私は、特にこのような雰囲気には非常に敏感である。言い知れぬ空気の冷たさが店の入口方向から居間へと流れてくる。私同様、店主もまた、異変に気づいたのである。眠い目を左手でこすりながら、ゆっくりと立ち上がり、そして店内へ歩いていった。

店全体は十二坪程度のスペースで、入口に取り付けてある自動ドアの隣がショーウィンドウ、店の入口から入って右側に時計の陳列棚、左側にはテーブルを二つ置き、卓上に各種の時計を飾っている。

店主は、体をくねらせながらテーブルをよけ、少し明るさが見える居間から見えて右隅のショーウィンドウ近くに歩いていった。私は震えながら居間の片隅で、店主の後ろ姿を目で追った。店主がショーウィンドウのところまで行き、立ち止まったその時である。店主の頭上で少し明るく輝いていた光は自然に広がり、何やら一人の、いや一人と言えるかどうかかわからないが、白い影になった。影の正体は定かではないが、私にも確かにそちらの方向から、かすかではあるが声が届いた。

「店主よ、静かに私の話すことを聞きなさい。私はお前に、この時計を授けよう。時を愛するお前に。この時計は、時間を二十四時間戻すことができるのだ。時を愛しているお前ならわかるだろう。時間は人の運命を弄ぶもてあそことがある。お前はあの時計店で、時間に翻弄された人間を幾人も見てきただろう。時は人を征服する。お前は、もう六十代半ば。これからの人生は時の番人として、この世界で暮らさない。私がふたたび訪れるその日まで。

人間は、何度も失敗するものだ。失敗していいのだ。なぜなら、失敗した出来事が未来へ進む扉だから。ただし、時として本当に失敗をしてはいけない時がある。万一、それに失敗してしまったならば、逆に人は後悔の念に押しつぶされ、未来の扉を開けられなくなってしまふ。

店主よ、今後この店の前を通る幾人かの中に、きっとここで立ち止まり、時の大切さを深く感じてこの店に入ってくる人がいることだろう。

その時、お前が感じた中で、もう一度時間を与えてもよいと思える人を決めなさい。戻れる時間は二十四時間までだ。そして、さかのぼった分だけ時間がたつ

たら、もう一度ここに来ることを約束させなさい。お前が戻ってあげた時間から、改めて人生のスタートを切った人が、ふたたびこの店を訪れた時、その人がどちらの人生を選ぶのか見届けなさい。ただし、最後の選択は本人にさせるのだ。それが、時を愛するお前の、時の番人としてのこれからの人生なのだ」

こう言うと白い影はゆっくりと小さな点になり、やがて闇の中へ消えてしまった。

私には、白い影の正体はよくわからないが、人間界で言う「天使」ではないのかなあと思った。

店主は呆然としたまま、そこに立っている。

店主が立っている左側のテーブルの上には、前にはなかった古時計が一個置かれていた。

やがて店主は我に返り、左側の卓上に置かれている古時計を大切そうに両手で持ち上げ、暗い店内を居間の方に戻った。そして居間から差し込む明るさのなか、古時計をじっくりと見ていた。

数分後、ようやく納得したのか、首を数回縦に振ってから、大切に抱きかかえた古時計を陳列棚の一角に置いた。私は、相変わらず居間の片隅で震えながら店主の行動を逐一眺めていた。そして、シーンと静まり返った店内に明日から起こる出来事を少し想像していたが、店主は古時計を置いたあと、私の目の前を通り過ぎ、居間の奥へと消えていった。普段通りの足取りながら、少し緊張した顔で――。

翌日の空模様は曇りで、どんよりとした雲が空全体を覆い、少しぶきみな光景に見えた。人間の正気さえも奪い去るような霽間気を私は感じた。

少し生暖かい風がベイエリアから銀座方向へと吹き寄せてくる。店主は、何事もなかったように店のシャッターを開け、いつもと変わらない一日がスタートした。私をひざの上に乗せ、いつも通り路地を眺めている。人通りは相変わらず少ない。時々、曇り空の下を銀座通りで買物をしてきたであろう人々が、道に迷った如く路地に入ってくる。辺りの風景を見、ビルに書かれた住所を確認すると、

「ここに用はない」といった足取りで時計店の前を足早に通り過ぎていく。店主は、道行く大人達が迷子のような挙動をする姿を見ては、独り笑いをしていた。

午後になると、通りを吹き抜ける風はさらに強くなり、外は天空全体を覆った雷雲のせいでさらに暗くなり、夕方になるとついに雨が降ってきた。

早川太郎は朝からそわそわしている。最近ギャンブルの調子がとてもよい。今日は東京競馬場で行われるGⅠレース（日本ダービー）があるので、空模様が気になって落ち着かない。昨夜は、テレビ各局の天気予報を目玉が飛び出るほどにチェックし、最終的に曇りであろうという判断に達した。

今の心配事は、まず天気のことである。

太郎が競馬をやり始めたのは、本来ギャンブルが好きということからではなかった。しいて言えば、太郎の勤務先に問題があったのだらう。

太郎は地方公務員である。もともと、区役所内で働いていたが、数年前、配置転換により区立図書館の蔵書管理担当者になった。当然の如く、図書館内で大声

は禁物、声の大きさに毎日毎日気を遣いながら同僚達と会話していた。毎日、朝八時三十分より午後五時まで、同僚と会話中も大声で笑うこともできず、また会話も極力最低限に済ませることも自然と染みついていた。

（どこかで思いっきり大声を、自分の意のままに出したい）

自分の想いを心に押し込みながら勤務している毎日であった。

そんな太郎はある日、テレビで競馬中継を見てびっくりした。何万人という人々が、競馬場のスタンドで喚声を上げ、その雄叫びにも似た声の重量感は、テレビの前で食い入るように見ている太郎の全身を身震いさせるほどの衝撃を与えたのだった。

（自分もあそこに立って、大声を出してみたい）

最初のきっかけは、そういう単純なことであった。

翌週、太郎は東京競馬場へと足を運んだ。

JR阿佐ヶ谷駅までバスを使い、中央線で西国分寺駅まで行き、武蔵野線に乗り換えて府中本町駅に着く。競馬場までの長い通路を大勢の人達に交じって流さ

れるように進んでいく。入口前の券売機で入場券を購入し、ゲートを通りコンクリート階段を足早に駆け上ってスタンドに立った。前方に見える競馬場の芝が目突き刺さるようで、広い馬場は、テレビでしか見たことのない太郎に鮮やかな三次元空間となつて覆いかぶさってくる。太郎は足の裏から脳天まで武者震いするほどの興奮を覚えた。

今まで経験したことのない解放感が、太郎を包み込んでいく。

（みんなここで、思いっきり声を上げて全身を解放しているのか）

太郎は高鳴る鼓動を押さえきれなかった。

ただ見ているだけじゃつまらないと思い、競馬新聞を購入し、本日の第五レースを新聞予想通りに三通り買ってみた。

ファンファーレが終了し、各馬がゲート内に収まっていく。そして全頭がゲート内に入った時、第五レースはスタートした。騎手に操られた十二頭の馬は、団子状態のままコースを疾走していく。各馬の尻尾の色はまちまちだが、一様にきらびやかに向かい風になびいている。騎手は互いにたづなを締めたりゆるめたり

しながら、向こう正面を走り抜け第三コーナに入っていく。そして展開は第四コーナを回ったところで太郎の選んだ馬が、先頭から三馬身あとのいい位置で入ってきた。太郎は叫んだ。

図書館にいる時のように自分の声を気にすることもなく、思いっきり叫んだ。残り六〇〇メートル、東京競馬場の長い直線の上り坂を各馬が必死に駆けのぼる。騎手と馬は一体となり、むちが飛ぶ。愛をこめて騎手はたたき続ける。そして、残り二〇〇メートルで先頭に立ち、ゴール。

太郎はストレスを発散すると同時に当たり馬券も手中にした。

「あ、あー」

抑えきれない興奮が太郎を覆いつくす。解放された心からは、雄叫びにも似た声がスタンドのコンクリート壁にはね返り、場内にこだましていた。

太郎は次第にのめり込んでいく。レースに外れたとしても、思いっきり大声を出せる競馬場は、太郎にとってこの上ない場所となってしまった。そして、多少

外れたとしても、穴一発当てれば取り返せるという短慮な考えを太郎は持ち始めた。最初のレースの興奮が頭から離れなくなってしまったのである。

だが小遣いには限りがあり、ついに家族の生活費を使うようになってきた。

一発当てれば回収できる。何日も前から真剣に競馬予想をするようになり、いつのまにか図書館の蔵書管理よりも、頭の中を競走馬が駆け回り始めていた。

そんな折、生活費を使い込んで買った馬券が万馬券となり、太郎は今までに注ぎ込んだマイナスを回収したのである。

(一発当てれば回収できる)

この言葉は、太郎の頭の中にインプットされた。やっとマイナスからの脱出。来週のGⅠレースでプラスに持っていく。運も味方してくれるに違いない。太郎の頭の中で、そんなシナリオが描かれたのである。

そうして当日がやってきた。

太郎は、六年前に同じ区役所で働いていた田沼よし子と結婚をした。平凡な職

場恋愛の末、上司に仲人をお願いし、結婚式と披露宴を近くのホテルにて挙げた。よし子は結婚してからも区役所を辞めず働いていたが、三年前、長女^{れい}玲の出産を契機に退職した。以後は専業主婦として夫太郎を支え、玲の育児に専念している。ごく一般的な公務員家庭の暮らしである。平凡ではあるが、人並みの幸せがそこにはあったのだが……。

太郎は、金曜日に銀行から生活費に使うお金と定期預金を解約して、日曜日の競馬の資金とした。

（今は運もある。月曜日にお金を戻しておけばいいのさ）

そんな思いが頭をよぎった。

いつものように電車を乗り継ぎ競馬場に到着したのは午前十一時を少し回った頃だった。当日のレースはすでに始まっており、スタンドの至るところから喚声やため息が聞こえてきた。高鳴る興奮はあったが、太郎は今日のGIレースに絞り込んでいた。前々日から予想をくり返し、自分なりに三点まで絞り込んでいた。（ちよっと早い、食事をしながら午前中のレースを観戦しよう。午後は最終予

想をしてメインレースGIで勝負）

太郎は本日の行動予定を決めた。スタンド内にある売店で、ハムサンドとブラックコーヒーを買い、観覧席に座りレース観戦しながら食べていたが、あまりにもわくわくするレース展開に背中がぞくぞくしてきた。

（ああ、午後のレース、GIレース前に少しぐらい買ってもいいだろう。GIレースまでに、プラスマイナスゼロに戻しておけばいいじゃないか）

心の中で、もう一人の自分がささやいた。

太郎はとうとう誘惑に負けてしまった。競馬場全体を包み込んでいる特有の雰囲気の中では、太郎の行動予定も頓挫した。はやる心が体を馬券売場の窓口へ連れていく。左手に競馬新聞を持ちながら、午後に始まるレースの馬券を買ってしまったのである。

しかし、だんだんと風は強くなり始め、太郎の頭の中で描いていたレース展開はくずれていく。購入した馬券はみんな外れてただの紙切れとなり、GIレース前には、今日持ってきた資金の半分を使い果たしていた。

（こりやあまずいなあ。やはりGIレースに勝負するしかないのか。新聞予想と自分の予想はそんなに違わない。パドックで見た馬の肌つやもいいし、動きも悪くない）

もう太郎自身、自分を止めることはできなかった。

“勝負！”

GIレースはスタートした。太郎の睨んでいた馬は、予想通りの展開で馬場をさっそうと走っていく。スタンドから見ている太郎は腹の底から突き上げてくる興奮に浸っていた。

向こう正面に入っても騎手は馬と一体となり、馬なりにいい位置を保ちながら走っていく。

しかし、前レース途中から徐々に降り始めた雨は、GIレースがスタートする頃には、はっきりと目にわかるくらいの粒にまで成長していた。さらに、中央高速道を横断してスタンドに向かって吹き付ける風も、一段と勢いを増してきた。当然芝全体は深く濡れ始め、競走馬の足元はとても滑りやすくなっていく。その中

で、馬群は一斉に第四コーナーに入ってきた。高鳴る興奮が太郎を高揚させ、やがて全身鳥肌が立つぐらい興奮度は最高潮に達した。

「行け、そのまま行け！ 絶対勝てる！」

馬群は第四コーナーを回り、最後の長い直線コースに入ってきた。

太郎の睨んだ馬は、インコースの芝が比較的ひづめで掘られた足元の悪いコースを進んでいく。馬群の中に巻き込まれ、なかなか進路を変えられない。

「外に出せ！」

太郎の声は、場内の喚声でかき消される。

馬は外に出ることができない。コースを選べないまま疾走する。しかし、前にいる二頭を騎手がうまくかわし、抜け出した。展開は太郎の読み通りになってきた。

「行け、行け！ たのむ！」

そして、残り四〇〇メートルにさしかかったところで、太郎の睨んでいた馬はなぜか、馬群の中に消えていく。騎手が二頭をかわして前に出て、むちを三回た

たいたあと、馬はよろけた。

つられて騎手もバランスをくずす。直後、急速にスピードは落ち、最後は歩いてしまった。

馬は右の前足をかばうように馬体を上下に激しく動かし始めた。太郎はスタンドからこの光景を目の当たりにして呆然とした。脳天から鋭く槍を突き刺されたような衝撃、言葉はおろか立ってられない状態で、

（右の前足を骨折した——うそだろう？）

馬群はスタンド前のゴールを勢いよく駆け抜けていく。太郎の睨んだ馬だけが、緑の芝の上で暴れ回っている。やがて、馬救車と救護班が来て、馬を車に乗せコーズ外に運んでいった。場内には、異様なため息やうなり声がこだましている。太郎にはそんな声など耳に入るはずもなく、しばらくスタンドの観覧席に座ったままうなだれていた。

動けないのである。予想をはるかに上回るアクシデント。天を仰ぐしかなかった。

それからの太郎の行動は、彼自身も記憶になく、ふと気がつくと街をぶらつきでいた。

（大変なことをしてしまった。よし子に何て言おう。明日からどうしよう。なぜ、自分はこうなってしまったのだ。どうしよう）

いろんな後悔の念の言葉が頭の中をよぎる。

（ああ、悔やんでも悔やみきれない）

耐えきれないほどの重圧が重くのしかかり、押しつぶされそうだ。太郎は、雨と風が吹く街をずぶ濡れになりながら彷徨っていた。

そして、時計店のある路地に入ってきたのである。雷雲が覆っている薄暗い街に、時計店の明るい光が差していた。

その光に誘われるように近づき、時計店のショーウィンドウの前で立ち止まり、いくつもの時計を見て何事か考えていた。

私自身は、雨はとてもきらいである。主人に拾われる前には、銀座の路地裏を

ずぶ濡れになりながら歩き回り、一夜を過ごしたこともあったからだ。早く雨が止んでくれればいいなあと思いつながら、主人のひざの上で彼と同様、街に降り続く雨を見つめていた。

そんな時、あの青年が店の前に現れたのである。しばらく何をするわけでもなく、店のショーウィンドウに飾つてある時計をじつと見つめたり、雨の中、空を見上げたりしていた。

やがて主人は、私をひざの上から下ろし、扉の方へ歩いていく。ずぶ濡れで店の前に立っている青年が気になったのだろう。扉を開け、主人は青年に声をかけた。

「あまり濡れすぎると風邪をひきますよ。なんなら店の中に入って雨やどりでもしてはいかがですか」

青年は突然主人から声をかけられびっくりしていたが、主人の呼びかけに素直に従い、店の中に入ってきた。

「ご主人、大変申しわけございません。少し雨が小降りになるまで、お言葉に甘

えて店で休ませてください」

小さな声でつぶやくように話した。

主人は、軽くなずいた後、奥にある洗い場に消え、やがて熱いコーヒーを一杯運んできた。熱いコーヒーを飲んだ青年は、心温かい主人の気遣いにほっとして、自然と涙を流していた。

「あなた、どうなされました」

少しばかりの沈黙が続いた。青年は、落ちてくる涙を右手でぬぐい、二度深呼吸をした。

「私は、早川太郎といいます。初対面のご主人にこんな話をするのは、とても恥ずかしいのですが、今日競馬場へ行き、ついと言おうか、とうとうと言おうか、家族にとって大切な金をつぎ込んでしまい、途方に暮れています。明日からどう生きていけばいいのかわかりません。疲れました」

太郎はその後、再度大きくため息をつき、両肩を前に落とし、視線を下に向けてたまま、ただ熱いコーヒーに息を吹きかけ、表面を少しさましながらすすって

る。

「そうですか。でも、あなたにはギャンブルをやる人の匂いがありませんね。私も長年生きていますので、多少は人を見る目を持っているつもりです。きっと何かわけがあつて、そこまでのめり込んだんでしょね」

「はい。ギャンブルそのものが好きで好きでしようがないということではないんです。自分は今、区立図書館に勤めています。仕事柄、毎日毎日自分の発する声に気を遣つて生活しています。ある日、テレビで観た競馬場の雰囲気にあこがれて以来、競馬場に通い、そこで大声を出すことがこの上なく好きになつてしまいました。そのうち馬券を買い始め、負ければ一発穴をねらつて回収するという、自分の理屈にはまり込んでしまい、とうとうここまで来てしまいました。本当に恥ずかしい限りです」

太郎の実直な言葉を聞いた主人は、少し考え込んでいたが、やがてあの不思議な時計に向かつて何やら独り言を言った後で、ゆつくりと重みのある声で話した。「この時計店には不思議な物がある。それを使えば二十四時間、時間を戻すこと

ができます。あなたがその気なら、今お話した競馬場に、あなたが到着した時刻にああなたの時間を戻してあげましょう」

太郎は突然の話に、ただ主人の顔を不思議そうに上目遣いで見ていただけだった。やがて、深く両肩で呼吸してから一度目をつぶり、頭をゆつくりと上下させた。

「もし、それが本当なら戻してください。お願いします」

主人は、はつきりとした口調で告げるように話した。

「ただし、戻してあげた時間からスタートし直したら、今の時刻午後七時に、また銀座のこの時計店に戻つてきなさい。そしてその時、一度目と二度目、二つの人生のうちからどちらか一つを選び、生きていきなさい」

太郎は主人の顔に視線を合わせ、素直に答えた。

「わかりました。約束は守ります」

主人は太郎を連れて、昨日天使から授かった時計の前に並んで立った。

その時、私の体に異変が起こった。私の視線がとらえていた風景が、突然太郎

を真後ろから見つめる視界に変わったのである。私は猫なので、常に視線は地上数十センチのところから見上げている。その視界に戻らないのだ。きっと私自身の体内で何かが変わろうとしているのだろう。はつきりとそう感じた。

店主は、右横にいる太郎の肩をポンとたたいたあと、競馬場に到着した午前十一時に時計を合わせ、そうっとスイッチを押した。

すると、古時計の周りの空気が渦状にゆっくりと時計に向かって歪み始めた。私は息を飲んだまま、太郎が歪んだ空気と共に渦を巻きながらあの古時計の中に吸い込まれ、消えていく情景を見ていた。そしてなぜか、太郎が消えたと同時に、この時計店内の空間も、太郎がふたたび帰ってくるまで外界とかけ離れた時空を漂うのだろうかと感じた。

太郎は、湧き上がる喚声の中で我に返った。

腕時計をそうっと見ると、午前十一時になっていた。

(えっ、本当にあの主人は、私の時間を戻してくれたのか)

太郎は大きく二回深呼吸したあと、まず何をすればいいのか考えた。このまま何もせず、ただ競馬を観戦して帰ろうか。それとも、前の人生で競馬場に到着した時に決めたGIレースだけに的を絞って勝負しようか。今の状況を頭の中で整理しながらあれこれ考えているうちに、十一時過ぎの第五レースはスタートした。そしてゴール。結果は前の人生の時と同様の馬が来たのだ。

(待てよ、時間が戻ったのは自分だけだとしたら、これからのレース結果はすべてわかっていて。ということは、すべての当たり馬券だけを買うこともできる) 太郎の心中で、負けて後悔し、どうしようもなかった時の自分が消え始めていた。

(資金はいっぱいある。これからのレースすべて当たり馬券だけを買えば、大金持ちになれるかも知れない。でも、そんなことがあっていいのだろうか)

太郎の心中には、複雑な気持ちが残っていた。

天使から渡された時計に吸い込まれ太郎の姿が消えてしまったあと、時計店内

には静寂が戻った。店主は、少し疲れたようにイスに座っている。私は居間の片隅で丸くなっていたが、時々頭の中に痛さが走る。太郎がこの店から姿を消したあと、私の視界は元に戻った。丸くなった体をさらに丸くする。

五分ほどして睡魔がおそってきた。すーっと眠りに落ちるだろうと思った時、私の脳裏に浮かんだ情景。それは太郎が広い競馬場のスタンドで、たくさんの馬が走っている姿を見ながら大声を出して応援している光景だった。本当に大声を出すことを楽しんでいるのだと確信した。天使は、太郎にどんな二度目の人生を与えるのだろうか。私は太郎の後ろ姿を見ながら少し考えていた。

そう、私も今、時空を超えて太郎のように時間をさかのぼったのだろうか。太郎は競走馬がすべてゴールしたあと、何やら両手を上げ大きく背をのびし、やがて、両手を強くにぎりしめて二度三度上下させていた。きっと太郎は何かを決めたのであろうと思い、問いかけてみたい気分で見つめた時、頭の中に強い衝撃を感じた。そして、目の前は闇の世界に変わった。

太郎は両手を高く上げ、背伸びしたあと、

「よし」

と一声発し、うなずいた。前の人生で決めた通りの行動予定にしよう。それは、GIレース一本に勝負することだ。

そして、太郎は自分自身への約束を守った。

案の定、午後のレース展開は、すべて前の人生同様となった。しかし、太郎は各レースに勝負はせず、資金もそのまま持ちにきちんと置いた。

（これは神様のお恵みなんだ。GIレースにこのお金を賭けよう。しかも当たり馬券一本に……）

GIレースはスタートした。しかし、太郎にはすでに答えはわかっていた。胸躍らせる高鳴る鼓動も手に汗にぎる興奮もなく、まるで何度も見た録画ビデオを見ているような光景だった。そして、残り四〇〇メートルであの馬は失速していった。馬群はすべてゴール。結果も同じ。ただ違うことは、今回太郎は当たり馬券を手中にしたことだった。太郎は当たり馬券を換金した。今まで見たことのない

ような大金を目の前にした。

しかし、太郎はそれほどおもしろくなかった。最初からわかっている筋書き。レース中大声を出すこともなく、冷静に録画ビデオを見ているような雰囲気。心の底から湧き上がるたてえようなない高揚感はなく、どこかに先が見えているむなしさを感じながら見ていた。

結局、最終レースを見ることもなく、太郎は競馬場をあとにした。

私が強い衝撃を受け、目の前が闇に包まれてからどれくらいたったのだろう。視界に明るさが見え始め、景色の遠近感もはつきりしてきた。私は時計店に戻っていた。太郎の背後から見えていた時、彼が何かを決めたように思えた。少なくともレースに当たってうれしそうな顔で帰ってきてくれることを願った。

結果は太郎に会ってみなければわからない。私は早く答えが知りたかった。

夕暮れ迫る帰り道の電車内で太郎は思った。筋書きの中で生きる人生は、多分

つまらないだろう。次に何が起こるかわからないから、人は興奮したりつまずいたり、泣いたり悲しんだりするのも知れない。自分は大声を出せないからといって競馬場でうさ晴らしし、あげくに大金をつぎ込んで大損してしまった。自分の弱さのために大切な家族さえ失うところだった。自分をいつも支えてくれている妻よし子、一人娘の玲。自分は目を向ける方向をまちがっていたのかも知れない。いや、まちがっていたのだ。本当に大切な家族の中で大声を出しながら、笑ったり泣いたり、悲しんだり楽しんだり。家族と共に先がわからない人生を精一杯生きる。そんな生き方に変えなければ……。

太郎は電車を乗り継ぎ、銀座までやってきた。地下鉄の改札を通り、長い階段を上ってやがて地上に出た。外はスコールのような雨である。太郎はあえて傘を買うことはせず、雨に濡れながら時計店の前に着いた。雨に思いつき濡れて自らの泥を流す、それが今の太郎にとって家族を不安の中に追いやろうとしていた自分への戒めだと考えたからだ。

私は、太郎がどういう表情で帰ってくるのか、不安で不安でしうがなかった。店主は相変わらず普段通りの行動を取っているように見えたが、やはり心の中では、私と同様太郎のことが気になっていたと思う。太郎と共に時空を超えて行つたけれど、太郎が何かを心の中で決めた時、私は時計店に引き戻されてしまった。天使から与えられた第二の人生がすてきであるように……。

しかし、店の扉を開けた太郎は、前回同様ずぶ濡れのままであった。私の不安は的中したのか、一瞬そう思った。

とその時、太郎は叫んだ。

「ご主人、僕に人生を二度与えてくれてありがとうございました。自分はやっと目がさめました」

主人は太郎に向かって冷静に話しかけた。

「二度目の人生は、いかがでした？ さあ、もう少しで午後七時になります。あなたのこれからの人生を一度目と二度目、どちらにするか決めてください」

太郎は、店主をじっと見つめたあと、ゆっくりと答えた。

「ご主人、私は二回目の人生で、自分にとっては分不相応の大金を手にすることができました。このままの人生の方がいいなあと思いました」。

前の人生のように大金をなくし、家族を崩壊させる答えだけは、出たくありません。ご主人、私のわがままかも知れませんが、私はこう思いました。家族は私にとって最大の財産です。この窮地を救ってくれたのはご主人です。信じてもらえるかどうかかわからないけれど、今回の出来事を素直に家族に話し、わび、明日から家族という財産をいちばんと考える行動を取っていきたいと思います。平凡かも知れませんが、私にとっては価値のある人生です。ご主人、申しわけございませんが、本日、家から持ってきたお金だけを持って、私は家に帰ろうと思います。残ったお金は、ご主人のところに置いていきます。私は、お金では絶対に買えないこの体験を、これからの人生の礎いしずえとして生きていこうと思っています。この人生を選択させてください」。

店主は太郎のはつらつとした表情を見、ただただうなずくだけであった。そしてその表情は、すこぶるうれしそうに見えた。

私は、太郎が人間としての誇りを持ち続け、つねに前向きに家族と共に生きていく人生を願ったことがうれしかった。自分に戒めを与えて自らを律することができる太郎だから、明日に向かってきちんと生きていけることだろう。

やがて太郎は、深々と店主に一礼し、少しだけ私の方に目を移したあと、店の扉を開けて出ていった。

店主はその後、店の扉を開け、ずぶ濡れで帰っていく太郎の後ろ姿を、ただ見送るだけであった。

あとがき

このたび、「上野発 桃源郷行き」の発刊にあたり、沢山の方々にご協力いただきましたこと、厚く御礼申しあげます。また、本書を手にとっていただきました読者の皆様方にも、厚く御礼申しあげます。

現在の社会景気は、まだまだ不透明です。男性も女性も子供もお年寄りも、様々な不安を胸に抱きながら、殺伐とした環境の中で生活を営んでいます。家庭内の悩みごとにも複雑化してきているように思いますが、皆、いろんな人間模様を描きながら生きています。

そんな毎日を生きながら、私自身もひとつの答えに到達しました。

“どんな思いがあろうと、どんな悩みがあろうと、決してあきらめず、「人生を生きる」。未来を信じ、どんなことがあってもあきらめず「生きていく」”。

この答えこそが、この本を通じて、読者の方々に伝えたかったことなのです。